

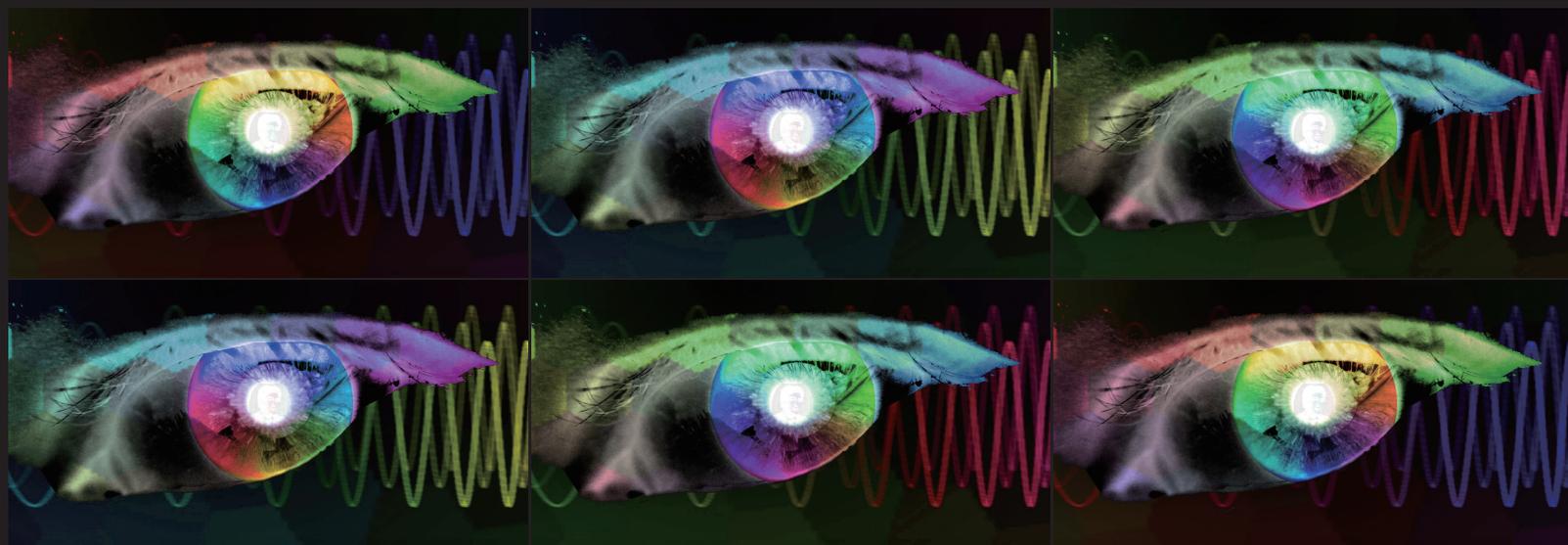
公開講演会

主催：人文学部 研究プロジェクト「ヒト認知系の総合的研究」

共催：人文社会・教育科学系附置 間主観的感性論研究推進センター、科学研究費補助金新学術領域研究「多元質感知」

絵画に対する選好と 色彩統計量

中内 茂樹 先生（豊橋技術科学大学 情報・知能工学系・教授）



日時：10月10日（火） 14:40～16:10

会場：新潟大学 総合教育研究棟 B棟5階プレゼンルーム

美しさを感じるメカニズムは古くから多くの研究者の関心を集めている。最近では神経美学 (Neuroaesthetics) なる分野も誕生しているが、美に対する科学的理解に関する研究は始まったばかりである。

本講演では絵画を対象とした、特に照明光の色温度および色相角に対する選好についての実験結果を述べる。色温度については、西洋人（ポルトガル人）と日本人の間に明確な違い（日本人は色温度が高い照明光を好む）が確認されたのに対し、色相角については、西洋人—日本人の間に違いは見られなかった。

また、色相角実験では、絵画の種類（肖像画、抽象画、風景画など）によらず、原画（色相角=0 deg）の色彩が最も好まれる傾向が見られた。さらに驚くべきことに、抽象画であっても、それらの絵画を見たことがない観察者であっても「原画選好」が見られた。そこで、WikiArtなどの絵画データベースから約4000枚の絵画データを収集し、様々な統計量について解析を行ったところ、見かけが大きく異なる絵画であっても、それらには共通した色彩特徴量が存在しているということ、またそうした特徴は一般的な写真などには見られないことがわかった。このことは、色相角実験で見られた「原画選好」が、比較的低次の色彩特徴量によって説明できる可能性を示唆している。

問合せ先：白井 述 (shirai@human.niigata-u.ac.jp)